

## 半夏 PINELLIAE TUBER

### (基原)<sup>1)</sup>

カラスビシャク *Pinellia ternata* Breitenbach (*Araceae*) のコルク層を除いた塊茎である。

### (性状)<sup>1)</sup>

やや偏圧された球形～不整形を呈し、径0.7～2.5cm、高さ0.7～1.5cmである。外面は白色～灰白黄色で、上部には莖の跡がくぼみとなり、その周辺には根の跡がくぼんだ細点となっている。質は充実する。切面は白色、粉性である。

ほとんどにおいがなく、味は初めなく、やや粘液性で、後に強いえぐ味を残す。

起原植物は多年生草本。花期5～7月。緑色あるいは緑白色の仏炎苞を咲かせる。果実8月に成熟。

### (産地)<sup>1)</sup>

日本：岩手県

中国：四川(遂寧、達県)、湖北、雲南、貴州、山東などの各省。

### (品質)<sup>4)</sup>

形は大きく充実し、色は白く緻密でえぐ味が充分強いものを良品とする。

### (成分)<sup>14)</sup>

フェノール類：homogentisic acid、3,4-dihydroxybenzaldehyde

3,4-diglycosilic benzaldehydeなど

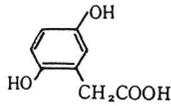
アルカロイド：l-ephedrineなど

アミノ酸：arginine、aspartic acid、methionine、glycineなど

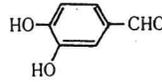
糖質：D-glucose、D-glucuronic acid、L-rhamnoseなど

その他：精油成分、 $\beta$ -sitosterol、palmitic acid、choline、シュウ酸カルシ

ウムなど



homogentisic acid



3,4-dihydroxybenzaldehyde

(現代薬理)

○鎮吐作用

- ・煎液は、ネコにcenilanid Dを静脈注射した場合に起こる嘔吐作用を抑制した。<sup>6)</sup>また少量のアポモルヒネおよび硫酸銅による嘔吐を抑制するが、嘔吐剤の多量の場合は煎液の大量でも鎮吐作用はない。<sup>14)</sup>
- ・煎液をイヌに投与すると、アポモルヒネおよび硫酸銅による催吐作用を抑制し、その最小有効量は3g/10Kgである。<sup>14)</sup>
- ・メタノールエキスは、トノサマガエルのコリンによる嘔吐を抑制し<sup>5)</sup>、カエル胸リンパ腔内投与で硫酸銅による嘔吐を抑制した。<sup>1)</sup>

○鎮静作用<sup>5)</sup>

- ・メタノールエキスは、マウスに皮下投与すると、自発運動抑制作用が認められ、また熱板法による検定で鎮痛傾向が認められた。しかしヘキソバルビタール睡眠の延長作用、体温降下作用は認められておらず、このことから半夏の中樞作用は弱いものと判断されている。

○唾液分泌亢進作用<sup>14)</sup>

- ・煎液は、ウサギで経口投与により唾液分泌亢進作用がみられ、咽痛の緩和作用が示唆された。また、ピロカルピンによる唾液の分泌の増加を減少させたとの報告もある。

○抗消化性潰瘍作用<sup>5)</sup>

- ・水製エキスは、水浸拘束ストレスマウスの胃潰瘍を抑制した。
- ・メタノールエキスは、皮下投与により有意な胃液分泌抑制作用があり、胃酸酸度を有意に減少させた。

反投与で耐性

○腸管内輸送促進作用<sup>5)</sup>

- ・メタノールエキスは、マウスで経口投与により、硫酸バリウムの腸管内移動を促進する傾向が認められた。

○抗アレルギー作用<sup>5)</sup>

- ・メタノールエキスは、ラット腹腔内マスト細胞のcompound 48/80による脱顆粒に対して抑制作用を示した。
- ・水製エキスは、マウス経口投与で、塩化ピクリルによる接触性皮膚過敏症、ツベルクリン及びヒツジ赤血球による足蹠反応を抑制した。

○ホルモン様作用<sup>1)</sup>

- ・エキスは、マウスの腹腔内投与により、肝amino transferase活性を上昇させた。また血中コルチコステロン値は上昇を示し、cortisone acetateによるtyrosine amino transferase活性を上昇させた。

○降圧作用<sup>4)</sup>

- ・水製エキスをラットに静脈内投与すると、一過性の血圧降下作用を示した。

○鎮咳・去痰作用<sup>7)</sup>

- ・水製エキスをネコに投与すると、ヨウ素を肋膜腔に注入することによって引き起こされる咳嗽を顕著に抑制した。

○鎮痙作用<sup>5)</sup>

- ・エキスは、モルモットの摘出腸管のアセチルコリンによる収縮を抑制し、ヒスタミン、塩化バリウムによる収縮に対しては弱い抑制作用が認められた。

○解毒作用<sup>14)</sup>

- ・マウスを用いた毒性試験で、硝酸ストリキニーネおよび塩化アセチルコリンに対し解毒作用を示した。

(古典的薬効、薬能)

薬味：辛 薬性：温 帰経：脾、胃経

神農本草経：(下品に記載)

傷寒、寒熱、心下堅きものを治し、気を下す。喉咽腫痛、頭眩、胸脹、咳逆、脹鳴。汗を止む。

薬徴：痰飲、嘔吐を主治する也。旁ら、心痛、逆満、咽中痛、咳、悸、腹中雷鳴を治す。

本草綱目：痰を消し、肺気を下し、胃を開き、脾を健にし、嘔吐を止め、胸中の痰満を去る。

中医学：和胃止嘔、燥湿祛痰、散結消腫

(その他)

・半夏は生姜と組み合わせて用いられることが多い。これは半夏を生薬のままかじると針がささったように感じる咽喉の刺激を防ぐ目的で用いられていると言われるものである。中国などでは、半夏を生姜と共に煮て修治したものが市場品にある。しかし一方では、生姜含まない処方も多い。生姜によらなくとも、煎じたり加熱することによって解決できるものであるからなのか、その刺激性成分が咽喉の症状によっては逆に有効であると考えたからなのか定かではない。<sup>4)6)14)</sup>

・修治による効果の変化について<sup>6)</sup>

トノサマガエルを鎮吐作用試験動物として用い、半夏から抽出した検液をその胸リンパ腔内に投与し、1時間後に0.8%硫酸銅水溶液(10ml/kg)を経口投与以後10分間に現れる嘔吐運動の回数を測定し、対照群(3%アラビアゴムを含む0.6%食塩液投与)に対する抑制率を求めた。試料としては半夏(生半夏)、姜半夏、法半夏などの修治半夏5倍量の50%メタノールで室温下5日間ずつ5回抽出、抽出液を合して40~50°で減圧濃縮エキスを製したものが得られた。その結果、生半夏、修治半夏エキス共に42~84%の嘔吐抑制作用が認められた。これにより、修治によって

効果に変化のないことが分かった。

・臨床応用<sup>6)9)</sup>

半夏+茯苓、生姜：健胃制吐作用を強める

(例) 小半夏茯苓湯

半夏+麦門冬：気を下げる作用を強める

(例) 麦門冬湯、温経湯

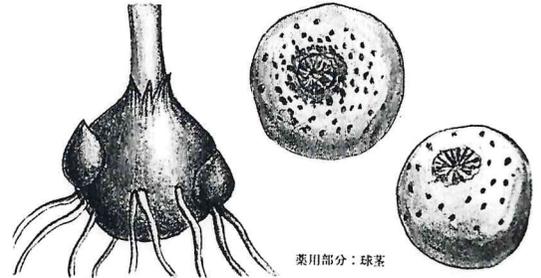
半夏+細辛、乾姜：心下の水気を排出

(例) 小青竜湯

半夏瀉心湯は心下痞硬で腹鳴、下痢、後背部、後頭部の凝りを伴い、これらの場合で胃炎や潰瘍などに使用されるが、精神神経症状(不眠、過敏性腸症候群など)を伴うときにも用いられる。嘔吐や下痢が強い場合は、生姜を増量して生姜瀉心湯とし、精神神経症状が強い場合は甘草を増量して甘草瀉心湯として用いる。

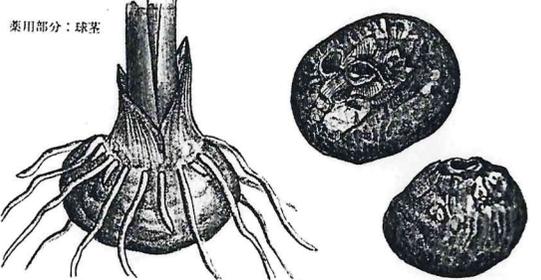
## 参考文献

- 1) 日本薬局方 第12改正
- 2) 和漢薬百科図鑑 難波恒雄著
- 3) ウチダ和漢薬勉強会資料 佐橋先生
- 4) ウチダ和漢薬生薬資料
- 5) 生薬ハンドブック ツムラ
- 6) 現代東洋医学 Vol.9 No.2 1988.4.1
- 7) 漢方製剤の知識 薬事日報社 ツムラ
- 8) 新古方薬囊 荒木性次 方術信和会
- 9) 漢薬の臨床応用 神戸中医学研究会
- 10) 薬徴・類聚方広義 西山英雄
- 11) 本草備要
- 12) 神農本草経 森立志
- 13) 意訳神農本草経 小曾戸丈夫 築地書館
- 14) 和漢薬物学 大塚恭男 南山堂



1154. カラスビシャク(ハンゲ, ヘソクリ, ヘブス) [ハンゲ属](さといも科)  
*Pinellia ternata* (Thunb.) Breit.

(烏柄杓, 半夏)  
【分布】北海道から九州および朝鮮半島, 中国に分布し, 畑地の雑草として普通に生える多年草。【形態】地下に径1cm内外の球茎があって, 1~2枚の葉を出す。葉柄は長く中央部にしばしば玉かご(珠芽)を生じる。葉は3出複葉, 花期は5~7月。花茎の先に肉穂花序ができ草丈40~60cm。【薬用部分】球茎(半夏<ハンゲ>Ⓔ)。夏, 花のある時期と10月の作物の掘りあげ時期に球茎を採集する。細長い根を除いて, 水と砂を入れた容器に入れてかきまぜながら外皮をとり除き, これを水洗いして日干しにする。【成分】球茎にホモゲンチジン酸, 3,4-ジハイドロキシペンズアルデヒドおよびその配糖体, アミノ酸, 脂肪酸, エフェドリン, コリンなどが含まれる。【薬効】健胃消化, 鎮吐, 鎮咳, 去痰などを目的として各種漢方処方に配合される。民間では脚気, 船酔い, 胃腸病, 神経痛, 毛生え薬などに用いる。【用法】通常生姜とともに漢方処方に配合される。【処方例】小半夏加茯苓湯(金匱要略:半夏, 茯苓, 生姜), 半夏瀉心湯(傷寒論:半夏, 人参, 黄芩, 甘草, 乾姜, 大棗, 黄連), 半夏厚朴湯(金匱要略:半夏, 紫蘇葉, 茯苓, 生姜, 厚朴)。【その他】半夏をかむとのがちくちくするようなえく味がするが, その成分は3,4-ジグリコシリックペンズアルデヒドとされている。和名のカラスビシャクはその仏炎包葉の形からきている。



1155. オオハンゲ [ハンゲ属] (さといも科)  
*Pinellia tripartita* Schott (大半夏)

【分布】本州中部以西から奄美大島の暖帯に分布し, 石灰岩地に多く生える多年草。【形態】地下に球茎があり, その上部から根を出す。葉は1~4枚, 球茎の頂端からでて, 葉身は3深裂する。花期は6~8月。根際から花茎を立て, 頂に鮮緑色の仏炎包に包まれた肉穂花序をつける。花軸の下部は仏炎包と合着しており, 片側に雌花群をつける。その上に雄花群をつけた花軸はむち状に伸長して直立する。【薬用部分】球茎(大玉半夏<ダイキョクハンゲ>)。7~9月に球茎を採取し, 茎, 葉およびひげ根を除去して水洗いし, さらに外皮をとり除いて日干しにする。【成分】不明。【薬効】カラスビシャクに代用して半夏として用いる。鎮嘔, 鎮吐, 鎮咳, 鎮静薬として, つわり, 胃部停水, 悪心, 嘔吐, 心痛, 咳, 腹中雷鳴, のど痛, 頭痛, 不眠などに用いられる。【用法】生薬3~6gにショウガ3~4gと水500~600mlで煎じ, 煎汁を1日3回に分けて服用する。【その他】和名はハンゲ(カラスビシャクの別名)に似て, 全体が大形であることによる。ときに仏炎包の内面が黒紫色の品種があり, ムラサキオオハンゲという。香港の漢薬市場では普通の半夏のほか, 小形のものだけにした「珍珠(チンジュ)半夏」, 大形のを「大玉半夏」と称している。本種は後者に含まれるが, オオハンゲの球茎以外にもテンナンショウ属のいくつかの種類が混じっているとわれ, 詳細はわかっていない。



漢方特別講座テキスト

生薬解説

半夏

日本漢方協会

## 【生薬の参考資料作成に当たって】

日本漢方協会

一、本講座の生薬解説についての参考のため、本資料を作成した。

一、編集対象の書籍は左記の通りであるが、左記の掲載順序がそのまま編集順序となっている。

なお、編集順序の意図は全体像を参考にするため、日中の局法等を掲載した。次に、古典類を年代順に配列し、最後に中医学の生薬解説書を掲載した。また、万病回春解説の中から生薬に関する箇所を抜粋し参考に作成した。

(1) 日本薬局法および日本薬局法外生薬規格

(2) 中華人民共和国薬典

(3) 和漢薬百科図鑑へ難波 恒雄 著

(4) 神農本草経へ近世・漢方医学書集成53 森立之

(5) 本草綱目へ李 時珍 国訳 本草綱目

(6) 本草備要へ王 昂 文光図書公司印行本および寺師 睦宗 訓

(7) 薬徴へ吉益 東洞・西山 英雄 訓訳 未収載生薬は近世・漢方医学書集成11 吉益 東洞

(8) 古方薬品考へ近世・漢方医学書集成56 内藤 尚賢

(9) 新古方薬囊へ荒木 性次 著

(10) 漢薬の臨床応用へ神戸中医学研究会 訳編

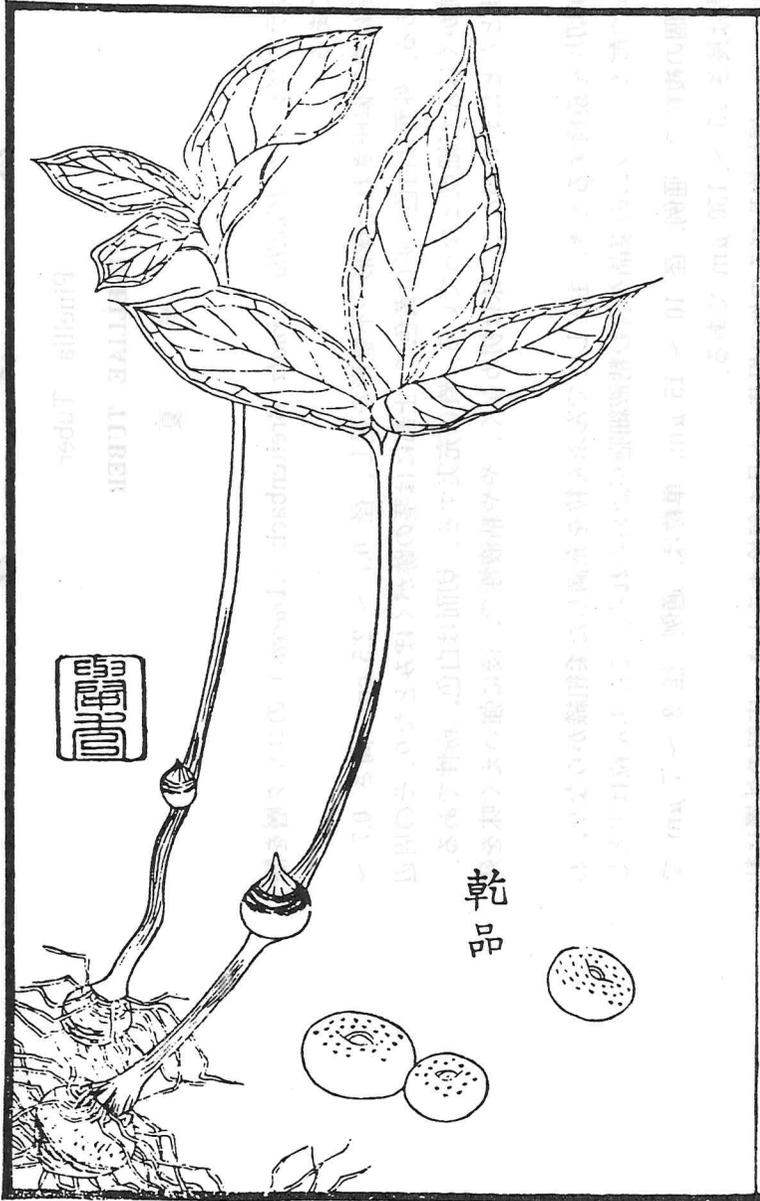
(11) 処方理解のための漢方配合応用および続編へ翻訳 医学研究会 監修 洪輝騰・根本 光人

(註) 万病回春解説へ松田 邦夫 著

一、全文を収載するとかかなりのページ数となるので必要と思われる部分のみ抜粋し編集した。ご了承願いたい。

一、編集の都合上、各原本と掲載位置、順序等が異なる事、また編集の掲載ミス等も予測されるが、この点も併せてご理解とご了承を願いたい。お気付きの点があればご指摘願えれば幸いです。

# 半夏



ハ シン ゲ

Pinellia Tuber

PINELLIAE TUBER

半夏

本品はカラスビシャク *Pinellia ternata* Breitenbach (*Araceae*) のコルク層を除いた塊茎である。

性状 本品はやや偏圧された球形～不整形を呈し、径 0.7 ～ 2.5 cm、高さ 0.7 ～ 1.5 cm である。外面は白色～灰白黄色で、上部には茎の跡がくぼみとなり、その周辺には根の跡がくぼんだ細点となっている。質は充実する。切面は白色、粉性である。

本品はほとんどにおいがなく、味は初めなく、やや粘液性で、後に強いえぐ味を残す。

本品の横切片を鏡検するとき、主としてでんぷん粒を充滿した柔組織からなり、わずかにシュウ酸カルシウムの束晶を含む粘液細胞が認められる。でんぷん粒は主として 2 ～ 3 個の複粒で、通例、径 10 ～ 15  $\mu\text{m}$ 、単粒は、通例、径 3 ～ 7  $\mu\text{m}$  である。束晶は長さ 25 ～ 150  $\mu\text{m}$  である。

純度試験 *Arisaema* 属植物及びその他の根茎 本品を鏡検するとき、皮部の外層に粘液道を認めない。

乾燥減量 14.0 % 以下 (6 時間)。  
灰分 3.5 % 以下。

斗 廠

注 釈

【本質】 生薬

【適用】 漢方処方用薬である。健胃消化薬、鎮吐薬、鎮咳去痰薬とみなされる処方及びその他の処方に比較的高頻度で配合されている。

漢方処方：温経湯，加味温胆湯，黄连湯，藿香正气散，甘草瀉心湯，堅中湯，香砂六君子湯，五積散，柴陷湯，柴苓湯，柴胡加竜骨牡蛎湯，柴胡桂枝湯，柴芍六君子湯，生姜瀉心湯，小柴胡湯，小青竜湯，小半夏加茯苓湯，参蘇飲，清湿化痰湯，蘇子降気湯，大柴胡湯，竹茹温胆湯，当帰湯，二朮湯，二陳湯，麦門冬湯，半夏厚朴湯，半夏瀉心湯，半夏白朮天麻湯，六君子湯など。

半 夏

Banxia

RHIZOMA PINELLIAE

本品为天南星科植物半夏 *Pinellia ternata* (Thunb.) Breit. の干燥块茎。夏、秋二季采收，洗净，除去外皮及须根，晒干。

【性状】 本品呈类球形，有的稍偏斜，直径1~1.5cm。表面白色或浅黄色，顶端有凹陷的茎痕，周围密布麻点状根痕；下面钝圆，较光滑。质坚实，断面洁白，富粉性。无臭，味辛辣、麻舌而刺激。

【鉴别】 本品粉末类白色。淀粉粒甚多，单粒类圆形、半圆形或圆多角形，直径2~20μm，脐点裂缝状、人字状或星状；复粒由2~6分粒组成。草酸钙针晶束存在于椭圆形粘液细胞中，或随处散在，针晶长20~110μm。螺旋导管直径10~24μm。

【炮制】 生半夏 除去杂质。用时捣碎。

清半夏 取净半夏，大小分开，用8%白矾溶液浸泡，至内无干心，口尝微有麻舌感，取出，洗净，切厚片，干燥。

每半夏100kg，用白矾20kg。

(96) ⑤半

姜半夏 取净半夏，大小分开，用水浸泡至内无干心时，另取生姜切片煎汤，加白矾与半夏共煮透，取出，晾至半干，切薄片，干燥。

每半夏100kg，用生姜25kg、白矾12.5kg。

法半夏 取净半夏，大小分开，用水浸泡至内无干心，去水，加入甘草-石灰液（取甘草加适量水煎2次，合并煎液，倒入适量水制成的石灰液中）浸泡，每日搅拌1~2次，并保持pH12以上，至口尝微有麻舌感、切面黄色均匀为度，取出，洗净，阴干或烘干。

每半夏100kg，用甘草15kg、生石灰10kg。

【性味与归经】 辛，温；有毒。归脾、胃、肺经。

【功能与主治】 燥湿化痰，降逆止呕，消痞散结。用于痰多咳嗽，痰饮眩悸，风痰眩晕，痰厥头痛，呕吐反胃，胸脘痞闷，梅核气症；生用外治痈肿痰核。姜半夏多用于降逆止呕；法半夏多用于燥湿化痰。

【用法与用量】 3~9g；外用适量，磨汁涂或研末以酒调敷患处。

【注意】 不宜与乌头类药材同用。

【贮藏】 置通风干燥处，防蛀。

## 7-6~7 半夏 (はんげ) PINELLIAE TUBER

(6.半夏 7.珍珠半夏)

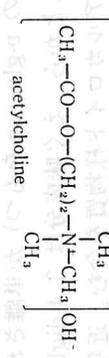
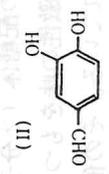
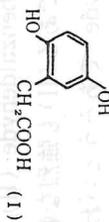
『神農本草經』の下部に収載され、古来から鎮吐、鎮吐の要薬とされている。李時珍は「札記の月令に“五月半夏生ず”とある。蓋し夏の半ばに相当するといふ意味である」といっている。陶弘景は「凡そこれを用いるには、十回ばかり湯で洗って滑らかなものをこ

とごくなくする。そうせねば毒があつて咽喉を刺激するものだ。処方の中に半夏があるときは、必ず生姜を用いる。それは毒を制するためである」といつている。この口唇粘膜の刺激性物質は、半夏の粘液細胞中に含まれている藤酸カルシウムの針晶によるものと考えられているが、他の化学成分を示唆する人もおり、まだ定説とはなっていない。香港市場では普通の半夏のほか、小形のものを集めて「珍珠半夏」、大形ものを「大玉半夏」と称しているが、「大玉半夏」には基源を異にするものがある。蘇敬が「江南には大きき直径一寸ほどのものがあつて、南方では特にそれを貴重ものとし、近來は両者を圧用しているが、その形状は大いに異なるもので、南方の人はこれを山賊の苗としている」といつているものがこれであろう。

〔基源〕 サトイモ科 (Araceae) のカラスビセンタク *Pinellia ternata* BRETTENBACH の根茎の外皮を除去し乾燥したもの。中国産の商品中にはまれに *P. pedatisecta* SCHOTT の根茎が混入されるともいつている。大玉半夏はオオハンゲ *P. tripartita* SCHOTT の根茎もしくはテンナンショウ属植物 *Arisaema* spp. の根茎であるが、その基源種は未詳である。また近年輸入されたことがある「水半夏」は *Typhonium flagelliforme* (Lodd.) BLUME (広西) の球茎である。

〔産地〕 中国(四川、湖北、河南、安徽、江蘇、浙江省など)、韓国、北朝鮮など。中国四川省産が産量最大で品質も良好といわれている。*P. ternata* は日本にも多く野生しているが、日本産のものはほとんど市場にでない。近年栽培化が行われつつあるが、現在輸入されているものは韓国、中国産のものである。

〔成分〕 多糖類、澱粉および精油 (0.003~0.013%)、アミノ酸類、粘液物質、脂肪油、 $\beta$ -sitosterol、 $\beta$ -sitosterol glucoside、triterpenoid、glucose、glucuronic acid、rhamnose、choline、Ca-oxalate、その他無機質(約1.9%)などを含有する。えぐ味成分は homogentisic acid (I) であるといわれていたが、最近半夏の95%エタノールエキスから 3,4-dihydroxybenzaldehyde (II) の配糖体 (2分子の D-glucose をもつ) が単離され、その aglycone である (II) も強烈な刺激性の味をもつことから、えぐ味成分は 3,4-diglycosilic benzaldehyde であろうといわれている。その他アルカロイド様物質を含む。近年微量の *l*-ephedrine の含有が報告された。



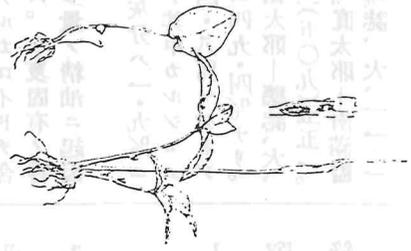
〔薬理作用〕半夏の煎液は apomorphine および硫酸銅によっておこされる嘔吐を抑制する。この鎮呕成分は glucuronic acid の誘導体および一種の水溶性配糖体であろうとされているが詳細は不明である。alkaloid 様物質は中枢神経および運動神経末梢抑制作用があり、また唾液分泌促進作用がある。

〔薬味、薬性〕辛。温。

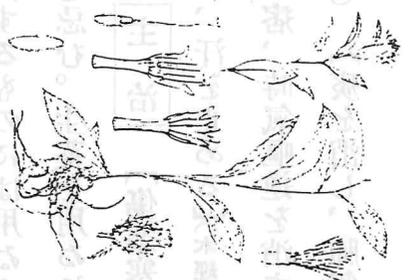
〔薬能〕半夏は脾胃両経の主薬である。脾は痰を生ずる源で、胃は谷を安んじる臓器である。半夏はよく湿を燥し、痰を化し、胃を和し、逆を降す。それゆえ半夏の主薬効は祛痰、鎮呕といえる。半夏の祛痰は、脾が湿を化すのでなく、あつめて痰として除くのであり、その薬性が温、燥であるので、寒痰、風痰に用いるべきものである。もし燥痰や熱痰に用いる場合は、竹瀝たけしやくで制したものをを用いるか、黄芩、姜汁を配すべきである。半夏の止嘔は、痰が気を塞ぎ、胃逆して和やかならざるを主とするが、その実半夏が嘔を治するのは痰飲の嘔吐のみでなく、胃虚の嘔吐にも用いる。『金匱要略』の「大半夏湯」は半夏に人參、白蜜を配合して用いている。熱症の嘔吐には、よろしく清胃の薬といつしよに用いるべきで、そうでなかったら熱勢を助長し、胃陰を傷ね、効がないばかりでなく、かえって害がある。

〔用途〕鎮呕、鎮吐、鎮静、祛痰薬として、胃内停水があつて、その上逆による悪心、嘔吐、咳嗽、心悸、目眩、頭痛、急性胃カタル、咽喉腫痛、妊娠悪阻、不眠症などに応用する。一般に生姜と共に用いる。

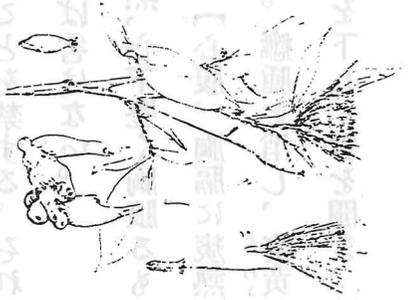
〔処方例〕小半夏湯(金匱：半夏、生姜)、半夏瀉心湯(243)、小半夏加茯苓湯(150)、半夏厚朴湯(242)、半夏湯(傷寒：半夏、桂枝、甘草)、大半夏湯(189)、二陳湯(228)。



*Pinellia terinata*  
半夏 (p.45)



*Arachnoides lancea*  
半夏花 (p.47)



*Arachnoides ovata*  
田花 (p.47)

半夏。一名地文。一名水玉。味辛平。生川谷。治傷寒寒熱。心下堅。下氣。喉咽腫痛。頭眩。胷脹。欬逆。腸鳴。止汗。

半夏 (本經下品)

和名 はんげ、からすびしやく  
學名 *Pinellia terinata*, Broit.  
科名 てんなんしやう科(天南星科)

釋名 守田(本經) 水玉(本經) 地文(別錄) 和姑(本經) 時珍曰く、禮記

月令に『五月半夏生ず』とある。蓋し夏の半に相當するといふ意味だ。故に守田と

(一) 牧野云フ、半夏ハ一ニ *Pinellia terinata* *berifera*, Ten. ノ學名ヲ有スルガ、原ト之レノ名ハ *Arum ternatum*, Thunb.デアツタエエ、其原種名ヲ探ツタ下ノ學名ヲ用ウレバヨイト思フ。

(三) 會意ハ義理ヲ考ヘテ附ケタ名デアアルトノコト。

(二〇) 木村(康)曰ク、半夏ハからすびしやくチ正條トス。支那産ハ本邦産ヨリ甚大形ニシテ徑一〇糶前後ノモノアリ、近縁ノおほはんげモ用ウベシ。

成分 からすびしやくハ有效成分ハ不明ナレドモ、フィットステリン、イソ油酸及一種ノアルカロイドヲ含有スト云フ。おほはんげハ鎮痙、祛痰、健胃、發汗及驅蟲劑トシテ用キラレタルモ、コニイン様ノアルカロイドヲ含有ス。半夏固有ノ香ハ少量ノ精油ニ起因

ス。灰分ハ一・九%ニシテ其中カルシウム一四・八% マグネシウム四九・四% ナリ。中山太郎一藥誌、大、一三(五〇九)五五一。久松直太郎一南滿醫學雜誌、大、一一(一)

名けるのであつて、(三) 會意の名稱である。水玉といふは形容だ。

根(二〇) 氣味 【辛し、平にして毒あり】 別錄に曰く、生では微寒、熟すれば温

である。生では人をして吐かしめ、熟すれば人をして下さしめる。湯で滑かきものを洗ひ盡して用ゐる。元素曰く、味は辛く苦し、性は温である。氣、味俱に薄く、沈にして降る、陰中の陽である。好古曰く、辛は厚く、苦は軽い、陽中の陰であつて、手の陽明、太陰、少陰の三經に入る。

之才曰く、射干が使となる。皂莢を惡み、雄黄、生薑、乾薑、秦皮、龜甲、及び烏頭を畏る。權曰く、柴胡が使となる。羊血、海藻、飴糖を忌む。

元素曰く、熱痰には黄芩を佐とし、風痰には南星を佐とし、寒痰には乾薑を佐とし、痰痞には陳皮、白朮を佐とする。多く用ゐれば脾、胃を瀉す。諸血證、及び口渴するものには用ゐることを禁ずる。それは津液を燥するからである。妊婦はこれを忌む。生薑を用ゐれば害はない。

**主治**

【傷寒寒熱、心下堅く胸脹るもの、欬逆頭眩、咽喉腫痛、腸鳴、氣を下し、汗を止める】(本經)

【心腹、胸膈に痰熱が滿結するもの、欬逆上氣、心下急痛、堅痞、時氣嘔逆を消す。癰腫を消し、痿黄を療じ、顔色を悅澤にし、胎を墮す】(別

錄) 【痰を消し、肺氣を下し、胃を開き、脾を健にし、嘔吐を止め、胸中の痰滿を

一)植成、研、二三一。  
江馬賤男—中外醫事  
新報、二三八。

去る。生で癰腫を摩す。瘡癭の氣を除く【甄權】  
【吐食反胃、霍亂轉筋、腸腹の冷、痰瘧を治す】(大明)  
【寒痰、及び身體を寒くし、冷物を飲んで肺を傷めた效を治し、胸中の痞、膈上の痰を消し、胸寒を除き、胃氣を和し、脾濕を燥し、痰厥頭痛を治し、腫を消し、結を散ずる】(元素)  
【肩稜骨痛を治す】(震亨)  
【肝風虛を補す】(好古)  
【腹脹、目を瞑し得ぬもの、白濁、夢遺、帶下を除く】(時珍)

(燥濕痰則腎虛宜通陰陽)



辛温有毒。體滑性燥。能走能散。能燥能潤。和胃健脾。  
補肝潤肺。除濕化痰。發表開鬱。下逆氣。止煩嘔。

發音聲利水道。

燥去濕。故利水。辛通氣。能化痰。故胃燥。朱丹溪曰。二陳湯。能使大便潤而小便長。

救暴卒。

萬生日。凡遇五絕之病。用半夏末吹入鼻中。即活。善取其氣。

能作毒也。五絕謂。逆死也。

治效逆頭眩。升則眩。痰厥頭痛。眉稜骨痛。風熱咽痛。

痰厥頭痛。眉稜骨痛。風熱咽痛。

成無己曰。半

氣而耳腎燥。又局方半硫丸。治老人虛秘。皆取其潤滑也。俗以半夏。南星。爲性燥。誤矣。氣去則土燥。痰涎不生。非一物之性燥也。古方用治。咽喉痛。痺吐。血下。血非藥劑也。二物亦能。散血。故打。破。皆。主。之。惟。

陰陽。非。則。非。熱。之。邪。而。用。利。竅。行。濕。之。藥。是。重。竭。其。津。液。之。罪。也。昔。藥。胸。脹。併。小。留。之。傷。寒。寒。

之。性。哉。甲。乙。經。用。治。不。眠。是。果。性。燥。者。乎。半。夏。硫。黃。等。分。生。薑。糊。丸。名。半。硫。丸。胸。脹。併。小。留。之。傷。寒。寒。

熱。故。小。柴。胡。湯。用。之。

熱。故。小。柴。胡。湯。用。之。

痰。瘧。不。眠。素。問。曰。胃。不。和。則。臥。不。安。半。夏。能。和。胃。氣。而。通。陰。陽。經。通。其。臥。立。至。又。有。端。微。不。得。眠。者。

陰。陰。氣。虛。故。目。不。得。眠。飲。以。半。夏。湯。陰。陽。經。通。其。臥。立。至。又。有。端。微。不。得。眠。者。

左。不。得。眠。屬。肝。張。宜。清。肝。右。不。得。眠。屬。肺。張。宜。清。肺。

反胃吐食。

痰。散。痞。除。癭。

消。腫。止。汗。

孕。婦。忌。之。

化爲五。濕。本。經。爲。唾。入。肝。爲。淚。入。心。爲。汗。入。肺。爲。涕。入。脾。爲。涎。痰。者。因。飲。而。動。脾。之。氣。也。半。夏。泄。痰。之。標。

不。能。治。痰。之。本。治。本。者。治。腎。也。效。無。形。痰。有。形。無。形。則。潤。有。形。則。燥。所。以。爲。流。脾。熱。而。胃。腎。燥。之。劑。也。俗。

不。能。治。痰。之。本。治。本。者。治。腎。也。效。無。形。痰。有。形。無。形。則。潤。有。形。則。燥。所。以。爲。流。脾。熱。而。胃。腎。燥。之。劑。也。俗。

不。能。治。痰。之。本。治。本。者。治。腎。也。效。無。形。痰。有。形。無。形。則。潤。有。形。則。燥。所。以。爲。流。脾。熱。而。胃。腎。燥。之。劑。也。俗。

以半夏爲肺藥非也止瀉爲足陽明除痰爲足太陰柴胡爲之使故柴胡湯用之雖云止瀉亦助柴胡主  
寒氣往來是又爲足少陽也時珍曰脾無濕不生痰故脾爲生痰之源肺爲貯痰之器按有聲無痰曰效  
善傷于肺氣有痰無聲曰嗽善動于脾濕也有聲有痰曰咳嗽或因火因風因寒因濕因勞因食積宜  
分辯論治大法片慈當以治痰爲先而治痰又以順氣爲主宜以半夏南星燥其濕積散積紅利其氣時  
處加溫飲之味肺熱加涼瀉之劑總宗曰二陳治痰世醫執之內以半夏其性燥烈若風寒濕食諸痰  
則相宜至以寒痰失血諸痰用之反能燥血液而加痰按古有三禁血家汗家渴家忌之然亦間有用之  
者○俗以半夏專爲除痰而半夏之功不見知於世矣小柴胡湯半  
夏瀉心湯皆用半夏豈爲除痰乎○火結爲痰○氣虛則火盛而痰○  
圖白而大陳久者良浸

七日逐日換水瀝去涎切片薑汁拌性畏生薑用之以制其毒得薑而功愈彰柴胡射干爲使畏生薑秦

皮龜甲雄黃忌羊肉海藻飴糖惡皂角反烏頭合陳皮甘草茯苓各名二陳湯爲治痰之總劑寒痰佐以乾薑太子熱痰佐以黃芩栝蒌

痰佐以蒼朮茯苓風痰佐以南星前胡痞痰佐以枳實三疝更香痰之所在才導引藥惟濕痰非半夏所司也韓飛霞造麴十法一薑汁浸造名生薑麴治  
韓飛霞造麴十法一薑汁浸造名生薑麴治  
治風痰開經絡一用白芷子等分或三分之一竹瀝和成略加細細名竹瀝麴治皮膚裏外結核癰頭之

痰一麻油浸半夏三五日炒乾爲末麴氣造成油以潤燥名麻油麴治虛熱勞瘵之痰一用臘月黃牛胆  
外略加熱酒和造名牛胆麴治癰癩風痰一用蒼朮香附麴等分煎膏和半夏作麴名開鬱麴治鬱  
痰一用芒硝居半夏三分之二黃透爲末煎大黃膏和成名銷黃麴治中風痰厥傷寒宜下由於痰者一  
用海粉一兩雄黃一兩半夏二兩爲末煉蜜和造名海粉麴治積痰沉痼一用黃牛肉煎汁煉膏即霞天  
膏和半夏末爲麴名霞天  
夏治尤河病痰功效最烈  
以上並照造麴法草蓋七日待生黃衣晒乾懸掛風處愈久  
愈良半夏製法不一有法半夏姜半夏仙  
半夏未半夏諸名○此治痰主藥

86 半夏 (宜、散) 鬱、燥、濕、痰、潤、腎、燥

- ① 辛溫有<sub>レ</sub>毒、體滑<sub>ラカニ</sub>性燥。
- ② 能走能散<sub>シ</sub>、能燥能潤<sub>ホス</sub>。
- ③ 和胃健<sub>レ</sub>脾、補<sub>レ</sub>肝潤<sub>ホス</sub>腎。
- ④ 除<sub>レ</sub>濕化<sub>シ</sub>痰、發<sub>シ</sub>表開<sub>ク</sub>鬱。
- ⑤ 下<sub>二</sub>逆氣<sub>一</sub>、止<sub>二</sub>煩嘔<sub>一</sub>、發<sub>二</sub>音聲<sub>一</sub>、利<sub>二</sub>水道<sub>一</sub>。

⑥ 救<sub>二</sub>暴卒<sub>一</sub>。

⑦ a 治<sub>二</sub>咳逆頭眩、痰厥頭痛、眉稜骨痛、咽痛胸脹、

b 傷寒寒熱、痰瘧不眠、反胃吐食<sub>一</sub>。

⑧ 散<sub>レ</sub>痞<sub>ラ</sub>除<sub>レ</sub>癭<sub>ラ</sub>消<sub>レ</sub>腫<sub>ラ</sub>止<sub>ム</sub>汗<sub>ラ</sub>。

⑨ 孕婦<sub>ハ</sub>忌<sub>ム</sub>之<sub>ラ</sub>。

⑩ 圓白<sub>ニシテ</sub>而大、陳久<sub>ナル</sub>者<sub>ハ</sub>良<sub>シ</sub>。

⑪ 浸<sub>スコト</sub>七日、逐<sub>ヒ</sub>日<sub>ヲ</sub>換<sub>フ</sub>水<sub>ヲ</sub>、瀝<sub>ニ</sub>去<sub>シ</sub>涎<sub>ヲ</sub>、切片<sub>ヲ</sub>薑汁<sub>ニ</sub>拌<sub>セル</sub>。

⑫ 柴胡・射干、爲<sub>レ</sub>使<sub>ト</sub>。畏<sub>ニ</sub>生薑・秦朮・龜甲・雄黃<sub>ヲ</sub>。忌<sub>ム</sub>羊肉・海

藻・飴糖<sub>ヲ</sub>。惡<sub>ム</sub>皂莢<sub>ヲ</sub>。反<sub>ニ</sub>烏頭<sub>ニ</sub>。

二八、半

夏 痰飲、嘔吐を主治す、兼ねて心痛、逆満、腹中雷鳴、咽痛、咳悸を治す。

半夏利<sub>レ</sub>喉<sub>ヲ</sub>除<sub>ニ</sub>欬<sub>一</sub>逆<sub>ヲ</sub>嘔<sub>ヲ</sub>。カラスビシヤク。

本經曰半夏味辛平有毒。主傷寒寒熱心下堅胸脹。



<p>欬逆頭眩。咽喉腫痛腸鳴。下氣止汗。案其味辛。莢有</p>	<p>毒。質滑降。故能瀉水氣。利咽喉。以除欬逆嘔吐。古人</p>	<p>與生薑乾薑同用者。速其功也。或謂加薑以殺之毒。</p>	<p>則不可。○生者刺人喉舌。故散服者。須炒用。如肘後</p>	<p>方救卒死法者。非生則無効也。<small>取半夏末以吹鼻中即甦。</small></p>	<p>小半夏湯諸嘔吐穀不得下者。</p>	<p>半夏瀉心湯嘔而腸鳴心下痞者。</p>
---------------------------------	----------------------------------	--------------------------------	---------------------------------	---	----------------------	-----------------------

半 夏      はんげ      別名      水玉

品考    からすびしゃくの根なり。和産、朝鮮産、中華産共に用ふべし。半夏は白き球をな

し、小粒は大豆程より大粒は拇指の頭程に至るものあり、質碎け易くして微に特異の臭氣を有し、味はなけれど暫時の後口中を刺戟することチクチクと刺すが如く甚だしき時は恰かも栗のイガを含みたるが如くにしてとてもやりきれざるものなり。昔者本町の藥種問屋に新米

の小僧來る時は先輩の小惡僧等半夏、天南星等の粉末を喰はせ其苦しむを見て大いに笑ひたりとか、以て封建時代の陋習を識るべし。

**撰用** 形大にして色白く緻密にして心まで白きもの良し。中の色汚れたるもの、或は半ば透通り堅くして恰も餅の破片の如き感じあるもの等は何れも良ろしからず。

**用法** 剉みて用ふ。その剉むに先立ち一夜清水に浸しよく心まで濡ほしたる後、箆にあげよく水をきり半ば乾きかかりたる時に庖丁にてトントンと剉めば堅からずぐらつかず、平らかに出來上りて粉も出でず誠に經濟にて手際よろし。後充分に乾燥し貯ふべし。

**効用** 本經に曰く半夏味辛平、傷寒寒熱心下堅を主どり氣を下し咽喉腫痛頭眩胸脹欬逆を主どり腸鳴を主どり汗を止どむと。

藥徵に曰く半夏主治痰飲嘔吐也旁ら心痛逆滿、咽中痛、欬、悸、腹中雷鳴を治すと。

ボク曰く、半夏は氣を補ひ水を去る故によく嘔吐、腹中雷鳴、咳逆等を治す。又咽痛を治す。

**應用** 極めて廣し。諸の胃や腸の病、胸や脇のやまひ、咽喉の病ひ、又は咳嗽を伴ふ諸の病ひに用多し。

### 1 半夏 (はんげ)

処方名 法夏・法半夏・姜夏・姜半夏・製半夏・清半夏・蘇夏。

**基原** サトイモ科 *Araceae* 半夏 *Pinellia ternata* (Thunb.) Breit. (カラスビシヤク) の球状塊茎を乾燥したもので、一般に炮製する必要がある、現在は生姜を加えて炮製した半夏をよく使用する。処方方に法夏(法半夏)・姜夏(姜半夏)・製半夏としてあるときは、姜半夏を用いる。清半夏は、明礬水に浸してから十分水でさらし・蒸して作ったものである。広東では一般に姜製のものを用いない。

**性味** 味は辛、性は温。有毒。(帰経：脾・胃経)。

**主成分**  $\beta$ -sitosterol glucoside・遊離の  $\beta$ -sitosterol・微量の精油・phytosterol・saponin・刺激性の alcohol 類・alkaloid など。

**薬理作用** 和胃止嘔・燥湿祛痰・散結消腫。

(1) 制吐：製半夏の丸剤と半夏の煎剤は、動物に対して制吐作用がある。生半夏の抽出液と生半夏の粉末(高温処理したもの)にも制吐作用がある<sup>27,28)</sup>。

(2) 催吐：生半夏・高温処理していない抽出液には催吐作用があり、古人が“生半夏は人をして吐せしむ”といっているのと一致する。ただし、生半夏粉末を高温処理すると催吐成分が消失して制吐作用が残る<sup>27)</sup>。

(3) 鎮静：有効成分は alkaloid の一種である。煮沸濾過した水溶液は呼吸を軽度抑制する<sup>29)</sup>。

(4) 眼圧低下：煮沸濾過した水溶液は、内服によって眼圧を軽度に低下する<sup>27)</sup>。

このほか、臨床的観察によると、祛痰・鎮咳作用がある。

**臨床応用** 嘔吐・痰飲に対する常用薬である。

(1) 嘔吐に、制吐作用を利用する。湿邪による嘔吐に効果がある。古人は経験的に、“胃寒による嘔吐には半夏が最適である”としている。臨床では、以下のような嘔吐に使用する。

①急性消化不良症による嘔吐で、心窩部がつかえて苦しいとき。茯苓・生姜を配合して健胃制吐作用をつよめ、たとえば小半夏加茯苓湯を用いる。

②慢性胃炎による嘔吐で、上腹部痛・噯氣・食欲不振などの脾胃気虚の症状をとまら

とき。陳皮・木香・縮砂や四君子湯(益氣湯)などを配合する。方剂例、香砂六君子湯(健脾和胃湯)(第七章 縮砂の項参照)。

③ 神経性嘔吐で、神経症の症状をとまらうもの。旋覆花・代赭石・生姜・竹茹などを配合する。

④ 妊娠嘔吐。生姜・黄連・党参などを配合し、たとえば生姜瀉心湯（第一章 生姜の項参照）を用いる。香砂六君子湯を用いるのもよい。

(2) 祛痰に用いる。咳嗽・多痰・白く粘潤な痰・胸部が苦しいなどの湿痰の症状（慢性気管支炎・気管支拡張症にみられる）に使用する。陳皮・茯苓などを配合した二陳湯（第八章 陳皮の項参照）を基本に、症状に応じて款冬花・前胡・川貝母などを加える。

頭痛・咳嗽・多痰・ときによだれを吐く・寒がる・寒さをきらう・眩暈などの痰厥頭痛の症状に対しては、半夏に天麻・白朮・陳皮などを配合して補脾燥湿・化痰祛風する。方剂例、半夏白朮天麻湯。

古人は經驗的に、“足の太陰（脾經）の痰厥頭痛は半夏でなければ治療できない”としているが、この面での半夏の作用機序は祛痰・鎮静であると考えられる。

(3) 生半夏をつぶして化膿症に外用すると、神経末梢に対して麻痺作用があるらしく、痛みが止まる。また、皮膚炎には生半夏を酢とすりつぶした汁を使用する。

〔附〕急性緑内障による頭痛・眼痛・悪心に対しては、半夏で対症的に治療できると述べている人もある。実験的に眼圧低下作用があるためである<sup>29)</sup>。

#### 使用上の注意

(1) 半夏の性質は辛燥で、咽喉・舌のしびれなどの副作用がある。生半夏の性質はさらにはげしく、咽喉の刺激・舌の腫脹・失声・嘔声などの中毒症状が発生するので、一般に十分に炮製してから使用すべきである。実験によると、明礬・生姜で炮炙したときには、明礬は動物に対する半夏の発声障害を除去し、生姜は半夏の制吐作用に協同的にはたらく<sup>30)</sup>。“半夏を炮製すると薬力が低下するので生半夏を用いるべきで、副作用の緩和には生半夏を砕いて生姜汁に10分ぐらい漬けるだけでよい”と主張する人もいるが、一般に内服するときには生半夏は使用すべきでない。寒痰による呼吸困難・咳嗽で生半夏が必要なときには、生姜を多量に加えて毒性を弱めるとともに祛痰・鎮咳の作用を強めるべきである。

(2) 姜半夏（法半夏）は燥湿・祛痰・制吐の力が強いので、脾湿\*による胃内の分泌物停滞（痰飲）・唾液が多く嘔気をとまらう寒痰によく用いる。

清半夏は辛燥の性質が非常に弱くなっているので、虚弱で痰が多く・寒湿の程度が軽いときに適している。このほかに清半夏と小麦粉を発酵させて作った半夏麴があり、辛平・

\* 脾胃氣虛のため水分代謝が障害されて生じた“湿”。

微甘で温胃化滯・解鬱の効能があるので、腹が脹り嘔気をとまらう脾胃氣虛に適する。

(3) 川貝母との比較：両者とも祛痰作用があるが、半夏は辛温で湿痰に、川貝母は苦涼で熱痰に適している。また、半夏は（茯苓を配合して）胃中の痰を、川貝母は（陳皮を配合して）肺中の痰をのぞく。一般には、川貝母と半夏を併用すると祛痰の力が全面的で強力になる。

(4) 陰虛・熱証・出血・肺燥で痰が咯出しにくいときなどには用いるべきでない。寒湿が原因でない咳嗽・痰・嘔吐には用いるべきでない。妊婦には用いない方がよいが、状態に適合しているときには用いてもよい。ただし法半夏を使用すべきで、紫菀・栝楼皮で代用してもよい。

(5) 半夏を服用して中毒症状があらわれたときには、砂糖で漬けた生姜片を服用するか、生姜を砂糖漬けにした汁を飲むと緩解する。

(6) 習慣的に半夏と烏頭の配合は禁忌とされているが、最近のいくつかの実験によると、半夏と烏頭を混合して動物に投与しても重篤な反応は起らない<sup>9)</sup>。

用量 9～12g。

#### 方剂例

(1) 小半夏加茯苓湯（《金匱要略》）：製半夏 9g 茯苓 9g 生姜 15g 水煎して2回に分けて温服。

(2) 半夏白朮天麻湯（李東垣）：製半夏 9g 天麻 9g 白朮 9g 麦芽 9g 陳皮 6g 神麴 9g 蒼朮 6g 党参 9g 黄耆 9g 茯苓 9g 沢瀉 6g 黄柏（あるいは黄芩） 5g 乾姜 3g 水煎服。

## 半 夏

〔性味帰経〕 性は温，味は辛，有毒。肺経，胃経に入る。

〔効能〕 1 降逆止嘔。2 燥湿化痰。3 消痞散結。

本品は辛散降逆，温燥化痰の剂で，脾胃を調えて上逆を降ろし痰飲を除く主要薬である。しかもその上逆を降ろす効能は，かなり良く嘔吐を止める効果をあげている。燥の性は湿を除く作用があるので，湿痰を治療し，辛味は消散する働きがあるので，氣を通じ痞結を消散することができる。従って氣が上逆し湿が阻滞して起きる嘔吐，悪心，痞満，また氣逆による痰の鬱滯で起きる咳嗽，吐痰などの症状に常用される。但し生で用いるとその毒性は劇烈である。生姜と共に炙したものは嘔吐を止め，明礬と炙したものは痰飲を除き，麴と炙すと痰飲と食滯を除く効果がある。

〔常用量〕 3g～9g

〔禁忌〕 本品は熱痰，燥痰及び津液不足で口渴するものには慎重に用いる。烏頭とは相反(禁忌)である。

〔参考〕 本品はサトイモ科の植物カラスビセンヤク [*Pinellia ternata* (Thunb.) Breit.] の塊根である。

本品はアルカロイド，揮発油，パルミチン酸，フィトステリン，サポニン，粘液質，澱粉，オレイン酸，ステアリン酸などを含有する。本品の祛痰作用はサポニンと関連がある。咳嗽中枢を鎮静し，氣管支の痙攣を除き，止咳する作用は，本品に含まれる揮発油，アルカロイドに関係がある。また本品の嘔



平成10年5月18日

北里東医研

参 考 資 料

半 夏

(株) ウチダ和漢薬

## 半 夏 (神農本草經 下品)

今年 7月2日

「意義」24節気以外の節(雑節)の一つである「半夏生」の頃に(最も勢いよく)生じる植物だからとされる。

半夏生:夏至(陽:6月21日頃、陰:5月27日頃)から11日目。

98年は陽暦7月2日、陰暦6月9日になる。

参考 98年立夏 陽:5月6日 陰:4月11日

立秋 陽:8月8日 陰:7月11日

### 〈基 源〉

「第13改正日本薬局方」

本品はカラスビシャク *Pinellia ternata* Breitenbach (サトイモ科: *Araceae*) のコルク層を除いた塊茎<sup>\*</sup>である。

「中国薬典」

本品は天南星科(*Araceae*: サトイモ科)の植物半夏(*Pinellia ternata* Breit.)の乾燥した塊茎<sup>\*</sup>である。夏・秋の二季採集し、泥を洗浄して落とす。外皮と細根を除去し、陽乾する。

※正しくは球茎である。

### ～ 参 考 1 ～ 天南星の原植物

「日本薬局方外生薬規格1989」

本品はマイヅルテンナンショウ *Arisaema heterophyllum* Blume, *A. erubescens* Schott 又はその他同属植物(*Araceae*)のコルク層を除いた塊茎である。

「中国薬典」

本品は天南星科(*Araceae*)の植物天南星 *Arisaema erubescens* Schott.、異葉天南星 *A. heterophyllum* Bl.、或いは東北天南星 *A. amurense* Maxim.の乾燥した塊茎である。秋から冬、茎葉が枯れた時に収穫し、細根と外皮を除き乾燥する。

「中薬志」

本品は常用中薬と為す。天南星科(*Araceae*)植物の天南星 *Arisaema erubescens* Schott.、異葉天南星 *Arisaema heterophyllum* Blume、東北天南星 *A. amurense* Maxim.、虎掌(掌葉半夏) *Pinellia pedatisecta* Schott の塊茎である。

### ～ 参 考 2 ～ 類似生薬

水 半 夏: サトイモ科 *Typhonium flagelliforme* Blume の塊茎。

中国薬典に収載されたこともあるが、1995年度版には外れている。広東、雲南省、広西自治区に分布し、広西の貴県、横県が主

産地である。

大 半 夏: サトイモ科 *Pinellia tripartita* Schott オオハンゲもしくは  
*Arisaema* 属(テンナンショウ属)の塊茎とされるが不祥。

虎 掌: サトイモ科 *P. pedatisecta* Schott の塊茎。

(掌葉半夏) 通称「掌葉半夏」と呼ばれるもので *Pinellia* 属であるが、中薬志  
では天南星の中に分類されている(中国薬典では半夏、天南星と  
もこの植物の記載無し)。華北、華中、華南、西北とほぼ全中国  
に分布している。

神農本草経にも「虎掌」の名で収載されている。本経の虎掌は天  
南星をさすとされる。(和漢薬百科図鑑)

### 〈半夏の分布〉

#### 「中薬志」

主産地は四川、湖北、河南、貴州、安徽等の省である。その他、湖南、江蘇、  
浙江、山東、雲南、貴州にも産出する。丘斜面の草むら、野原、田畑(特にト  
ウモロコシ畑)、河岸、疎林に生育する。

#### 「第13改正日本薬局方」

中国では四川省の遂寧、達県を主産地とし、その他湖北省、安徽省、江蘇省、  
雲南省、貴州省、山東省からも産出する。原野、田畑に自生する。

#### 「中国常用中薬材」

半夏の主な分布地は湖北、四川、河南、安徽、山東、貴州である。浙江、湖南、  
江蘇、河北、江西、陝西、甘肅、山西、福建、広西、雲南にも分布する。土壤  
は肥沃でよく耕されている土地(農作物が作られているところ)に生育する。

#### 「中薬大辞典」

全国大部分の地区で生産される。主産地は四川、湖北、安徽、江蘇、河南、浙  
江等で、四川省は産量大で品質は良好である。

#### 「薬材資料汇编」

長江流域の各省に均等に自生している。四川南東部、雲南北東部の省境周辺の  
ものが品質良好である。田畑、野原に自生する。麦畑が最も多い。

### ～ 参 考 ～ 天南星の分布

#### 「中薬志」

異葉天南星: 吉林、遼寧、山東、江蘇、安徽、浙江、江西、福建、湖北、湖南、  
広東、広西、陝西、甘肅、四川、雲南省等。

天南星：東北、内蒙古、新疆、山東、江蘇省以外の各省に分布。林下、低木や草むらの中の日陰で湿った地或いは野原、草の茂った斜面に自生する。

東北天南星：黒龍江、遼寧、内蒙古、河北、山西、寧夏、河南、山東、陝西省等。林の下、小川端の日陰の湿った地に自生。

虎掌：河北、河南、山西、山東、江蘇、安徽、浙江、江西、福建、湖北、湖南、広東、広西、陝西、甘肅、四川、貴州、雲南省等。林の下、山谷、河岸或いは野原、草むらの中に自生する。

#### 「葯材資料汇编」

山野の湿った地に自生する。河南、陝西、安徽、四川、湖北、浙江、江西、甘肅省等に生産する。

#### 〈産地〉 中国常用中葯材、葯材資料汇编、全国中葯材資源分布から

四川省東部：遂寧、達県、安岳、万県、岳地、壁山、隆昌、忠県、大足、大竹、執江 等

四川省南東部：昭覚、雷波、馬辺、屏山 等

四川省その他：崇慶、大邑、蒲江、漢源、彭県、樂山、天全、稻城、塩源、郷城

湖北省：老河口、襄陽、鐘祥、天門、潜江、江陵、谷城

貴州省：大方、赫章、威寧、水城、湄潭、江口、遵義、銅仁、普定 等

雲南省：永善、昭通、宜威、禄勸、永勝、麗江、保山、永徳、文山、視山 等

安徽省：淮濱、霍丘、阜南、宿県、靈璧、黄山

江蘇省：浜海、阜寧、淮陰

山東省：巨野、臨沂、膠南、即墨 等

甘肅省：天水、礼県、西和県、両当県、徽県、成県、康県、武都、文県、等

#### ～ 参考 ～ 天南星の産地

河南省：長葛、登封、禹州、臨汝、芦氏 等

陝西省：石泉、華陰、朝邑、大荔 等

四川省：雅安、石棉、漢源、樂山、洪雅、天全、稻城

雲南省：昭通、麗江、永勝 等

湖北省：通城、通山、谷城

安徽省：黄山、霍山、舒城、亳州、宿県、靈璧

貴州省：水城、湄潭、銅仁、赫章、大方、普定等

### 〈採集加工〉

『和漢薬 240 号』木村雄四郎

半夏生（98 年は 7 月 2 日）を中心に前後 1 ヶ月が採取の適期である。即ち 7 月上旬、畑地に野生するカラスビシャクが花後枯死する頃を目標として塊茎を掘り取るが、地方によっては麦の刈り取り後、耕耘する際、露出する半夏の塊茎を集めて土をふるいわけするのも一案である。塊茎は水におよそ 3% の割合に塩を溶かした塩水（または海岸地域では海水）を用い、よく芋の子洗いでかき混ぜながら外皮を除き、ついで水に浸してよく塩分を除いたのち陽乾し真白にほしあげる。外皮は半夏生の前後でないとはがしにくい。外皮を除かないと乾燥せず発芽する。

『和漢薬 389 号』伊藤敏雄

多数の少数民族が山地の半夏を収穫しており、半夏の皮むきには生の半夏を竹のカゴに入れて川につけておいて、このカゴをもんで皮をとりのぞき、天日で晒す。

『中国常用中薬材』

春と秋の両季に晴天の日を選んで採集する。収穫したナマの半夏は 10～15 日程放置し、外皮を少し腐らせ剥がしやすくする。ふるいを用いて大・中・小に分ける。等級別にカゴの中に半分程半夏を入れ、流水に入れ白くなるまで足で踏んで外皮を去る。もし手に半夏が触れたら、生姜汁か菜種油を塗り、かぶれるのを防ぐ。皮を去った後、強い日差しの下で陽干するが、早朝に干しはじめる。日中の地面が熱くなってしまってから干しはじめると急な熱によって糊化しやすくなる。（糊化したものは油子という。）乾燥しはじめる時天气が悪い時は、1～2 日に 1 回防腐の目的で飽和ミョウバン水につける。半ば乾燥してから天气が悪くなった時は硫黄で 1 日薫蒸する（100kg につき 1kg の硫黄）。これも防虫・防カビの目的である。乾燥途中にはひっくり返さない。

秋末に収穫される半夏は気温が低かったり日差しが強くない為、火力乾燥する。まず始めは強火で行い、半夏の表面に水滴が付く。それを随時布で抑えるようにして拭く。油子（糊化したもの）が出来ないようにする為、乾かないうちはかき混ぜないこと。

<当社調査による。於甘肅省西和県 97年8月13~15日>

採集地：小高い丘に囲まれた平地畑にはトウモロコシが植えられており、又、既に刈り取りの終わった小麦畑がある。野生の半夏はこれらの畑の中に自生している。西和県は標高平均1700m。1700m以上では大麥の栽培

採集時期：西和県では立夏後の半夏生の（仏焰苞が出始める）頃から収穫し始め、7~8月の2ヶ月間に渡って収穫する。仏焰苞が完全になくなってしまふ時期（9月下旬）には西和県では野生品は採集しない。

cf. 四川省では5月下旬~6月初旬頃から収穫し始める。

栽培：根については塊茎で薬用になり得ないもの（珍珠が0.7cm以下なので、ナマの皮付きの状態では1cm以下のもの）は泥付きのまま土間に保存しておき（これが栽培用の種芋となる）、10月下旬に別の畑にまとめて植え替える。1年後の秋（野生品の収穫が終わってから）収穫する。珠芽と呼ばれるムカゴ（？）を利用して栽培する方法はまだ実験段階である。

野生品と栽培品の割合は野生品が70~80%である。

加工：(1)採集後、農民自身で竹籠に粗皮付きのナマの半夏を入れ、籠ごと水中に入れ、足で踏んで粗皮を除き、天日乾燥する。これは「毛貨」と称し、乾燥は不完全（8~9割乾燥）で外皮の去りかたも適当で、薄皮が残っており、表面は褐色で汚い。

(2)「毛貨」を農民達は加工工場（供鎖社及び薬材公司、個人経営社）へ持ち込む。

\*量的にはわずかだが粗皮付きのナマのものを加工工場に持ち込むこともある。

(3)形の良いものと悪いものを選別後、再度水の中で完全に皮去りする。

(3)-1 形の良いもの：機械で皮去り。1台で1日2t。

(3)-2 形の悪いもの：竹籠に入れ、足踏みによる完全皮去。

(1回約10分。1人1日60~70kg)

\*機械去りで皮去り不十分なものは(3)-2へ。

(4)\*一次乾燥（天日）。6~7割乾燥。表面の水気がなくなり、べたつかなくなるまで)

※温風乾燥の設備を持っているところは60℃で4~5時間乾燥。

その後、(6)へ（硫黄薫蒸はしないとのこと）。

- (5) 硫黄で薫蒸(約3時間)。
- (6) 天日乾燥(晴天ならば3~5日で出来上がり)。
- (7) 手選別で異常に形の悪いもの、皮去りがよくないものを除く。
- (8) 篩で等級別にする。

野生品における等級別比率

甲-10%弱、乙-15~20%前後、丙-40%前後、  
不定形-20%前後、珍珠-10%前後  
収率 ナマ根から約30%になる。

〈規格〉

(1) 中国国内通常規格(1997年度)

甲級 700~760粒/kg 径1.2cm以上  
乙級 1400~1600粒/kg 径1.0~1.2cm  
丙級 2700~3000粒/kg 径0.8~1.0cm  
珍珠 径0.6~0.8cm

(2) 中薬材主要品種出口規格標準(輸出規格:1981年)

特級 300~360粒/kg	丙級 2700~3000粒/kg
甲級 700~800粒/kg	珍珠 3000粒以上/kg
乙級 1400~1600粒/kg	

(3) 最近の輸出規格

特級 800粒以内/kg	丙級 2600~2800粒/kg
甲級 900~1000粒/kg	珍珠 3000粒以上/kg
乙級 1700~1800粒/kg	

~参考1~

「中国常用中薬材:科学技術出版社 1995年」

国家医薬管理局中華人民共和国衛生部制訂半夏商品企画標準

一等 800粒以内/kg	三等 3000粒以内/kg
二等 1200粒以内/kg	統庄 径0.5cm以上

~参考2~ 当社製品規格

北里東医研:甲級を再度1.2cmで篩い直し、1.5cm以上を20%含むように

(片製) 調製したもの。

- 1 級 片:甲級を再度1.2cmで篩い直したもの。
- 2 級 片:1.2cmで篩い直した時に下に落ちた甲級の一部と乙級を1cmで再度篩い直したもの。

碎 : 乙級を再度 1 cm で篩い直したもの。

3 級 片 : 中国国内通常乙級と乙級の 1 cm 以下。

### 〈修 治〉

調整方法の違いにより、生半夏、清半夏、姜半夏、法半夏等がある。中国薬典には「半夏」の中の「炮製」の項に「生半夏」「清半夏」「姜半夏」があり、「法半夏」は1つの別生薬として記載されている。

生半夏：日局の半夏にあたる。中国では消腫散結に働く。毒性が強い為、一般

には炮製した製半夏を使用する

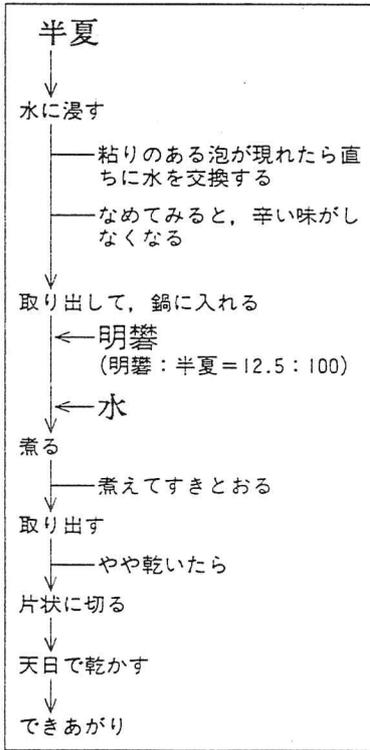
清半夏：化痰燥湿に優れている。

*中国の修治した半夏は外用にする。*

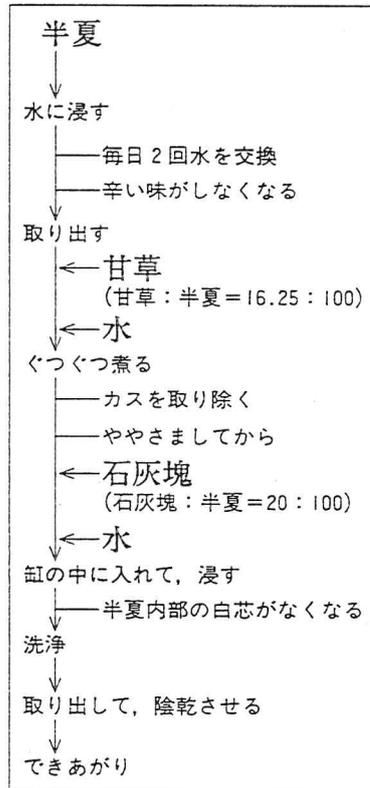
姜半夏：降逆止嘔に優れている。

法半夏：和胃燥湿に優れている。

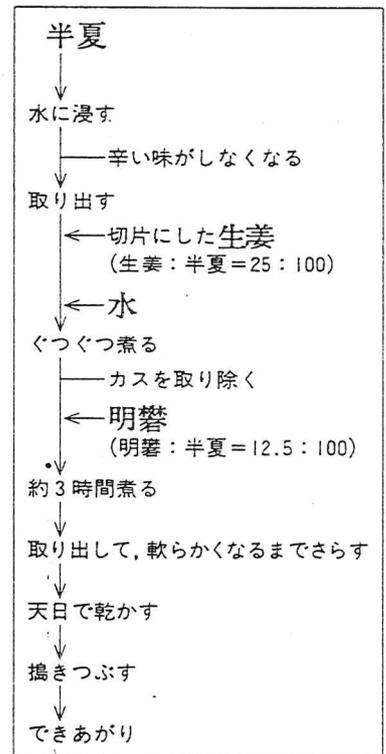
#### 【清半夏】



#### 【法半夏】



#### 【姜半夏】



中国で行われる半夏の修治方法

現代東洋医学 Vol. 16 No. 1 より抜粋

## 〈薬効〉

薬 徴：痰飲嘔吐ヲ主治スル也。旁ラ心痛逆満、咽中痛、咳悸、腹中雷鳴ヲ治ス。

重校薬 徴：痰飲嘔吐ヲ主治ス。心痛逆満、腹中雷鳴、咽痛、咳悸ヲ兼治ス。

古方薬 議：味辛温。氣ヲ下シ、胃ヲ開キ、痰涎ヲ消シ嘔吐ヲ止ム。欬逆、喉咽腫痛ヲ主ル。

薬性提要：辛温。小毒有り。湿痰之主薬ト為ス。水飲ヲ利シ、逆氣ヲ下シ、嘔吐ヲ止ム。

古方薬品考：其ノ味辛斂。毒有り。能ク水毒ヲ瀉シ、咽喉ヲ利シ、以ッテ欬逆嘔吐ヲ除ク。

神農本草経：味辛、平。傷寒、寒熱、心下堅、下氣、喉咽腫痛、頭眩、胸張、欬逆、腸鳴、汗止。

中国薬典：辛温有毒。脾、胃、肺ニ入ル。燥湿化痰、降逆止嘔、消痞散結ス。痰多咳喘、痰飲眩悸、風痰眩暈、痰厥頭痛、嘔吐反胃、胸膈痞悶、梅核氣ノ症ニ用フ。

生(生半夏)ハ瘍腫痰飲ニ外用<sup>\*</sup>シ、姜半夏ハ降逆止嘔ニ多用ス。

※外用：末ニシテ酒ニテ練リ患部ニハル。

用薬心得十講：味辛、性温。燥湿化痰、健脾胃、和中降逆、止嘔吐作用ヲ有ス。

## 〈薬理〉

### 「中薬大辞典」

1. 鎮咳去痰作用：1%のヨード溶液により誘発した咳嗽に対して、半夏の煎剤を内服させたとき持続性の鎮咳作用を示す。静脈注射でも明らかな止咳作用を認める。イヌの投与で去痰作用を示さないが、ウサギの胃に半夏末を注入するか、又は50%エタノール浸出液及び水浸剤を腹腔内注射すると、ピロカルピン誘発の唾液分泌を抑制する。ウサギに煎剤を内服させると、唾液の分泌がまず増加し、以降次第に減少し、唾液中の固形成分が増加するので、咽喉痛を緩和する作用があると考えられる。
2. ラットの実験的矽肺に対する防止治療効果：ラットの気管に石英粉塵を注入した矽肺モデルに、姜半夏の1.5%塩酸抽出液あるいは60%エタノール抽出液を腹腔内注射すると、矽肺の進行を抑制する。
3. 鎮吐作用：アポモルヒネあるいは硫酸銅に対するイヌの嘔吐に対して煎剤を胃に注入すると鎮吐作用が見られる。

4. 解毒作用：半夏に含まれるグルクロン酸誘導体には解毒作用があり、ストリキニーネのマウスLD<sub>50</sub>を上昇させる。アセチルコリンに対しても解毒作用をしめす。

「生薬学雑誌37(1), 73~83(1983)」

5. 5倍量の50%MeOHで室温下5日間づつ抽出し抽出液を合わせ40°~50°で減圧濃縮して得た半夏エキス(収率6.1%)のマウスのLD<sub>50</sub>は経口で生薬換算250g/kg以上、皮下投与で205.7g/kgであった。漢方においては半夏は有毒とされるが、これは咽喉に対する強い刺激を毒と考えたことによると思われる。
6. 半夏エキスと乾姜エキス(日局生姜のエキスのことか?)を併用すると漢方でいわれる半夏に対する乾姜の緩和作用を裏付けるような顕著な拮抗作用は認められず、中枢において自発運動抑制作用、鎮痛作用、ヘキソバルビツール睡眠延長作用などが増強され、併用による協力作用が認められた。しかし、鎮吐作用、胃酸分泌抑制作用などの末梢性作用では協力作用はなかった。また併用により抗利尿作用が現れた。

「現代東洋医学Vol. 16 No. 1」

7. 半夏の特異なえぐみ味の成分はホモゲンチジン酸が報告されているがその他に3-4-diglycosilic benzaldehydeが本体との報告がある。
8. 鎮吐作用は迷走神経胃枝の刺激による胃の運動機能促進によっておこることが示唆されている。その迷走神経胃枝刺激に関係する迷走神経賦活作用を有する物質としてはセレブロシドが活性があることが分かっている。

「漢方医学Vol. 8/1984. 3」

9. 粉末における口唇粘膜に対する刺激の原因の一つは粘液細胞中に存在する蔞酸カルシウムの針晶によるものとされ、これは煎剤にする時粘液の膨化によってつまれるので消失されると推定される。ところでこの意見に反論もあるので参考として下記に記す。

生姜が半夏の  
毒性をえる。

## ～ 参 考 ～

日本では皮を去っただけの生半夏をそのまま使っているが、中国をはじめ諸外国では、生半夏は有毒とされ、外用には良いが、服用してはならないとされている。どのような毒性かあまり中毒の臨床例も報告されていないようだが、口や喉の粘膜を刺激し、量が多いと炎症を起し、声が出なくなったり、呼吸困難、吐血で死に至ることもあるという。

生半夏の煎液はのどを刺激するえぐ味があるが、その主体成分はサトイモやタケノコのえぐ味物質と同じホモゲンチジン酸、あるいはその配糖体などのフェノール性物質である。化学構造上ウルシの成分にも似たところがある。半夏厚朴湯など、のどチクチクの薬に配合するのだから首をかしげざるを得ない。

修治の方法は色々あるようだが、(中略) いずれにしても、時々水を替えながら1週間から2週間かけて、中心部まで水が浸透し白い部分が全部半透明になるまで浸しておく。私の研究室の実験ではこの段階ではブドウ糖が溶け出して来るだけで、フェノール性物質に変化はない。日本の書物に「泡をすくいとる」と説明したものがあるが、泡は大して出ない。泡という字は中国語では水に漬けるという意味で誤訳ではないだろうか。(中略) ホモゲンチジン酸などのフェノール性刺激成分は明礬に漬けた段階でほぼ消失しており、製品には、北京市規範に従って試製したもの、中国各地、香港、台北などで買い集めたもの、いずれにも全く認められなかった。試製した姜半夏で半夏厚朴湯を作って薬局で試してもらったところ、味も良く、よく効くといって患者さんの評判は大変良かったということである。(中略)

日本では生半夏ばかりを使っていて、何故問題が起らないのかが疑問である。一つは使用量が少なく、少しぐらいえぐい味があっても患者さんは我慢しているのかもしれない。もう一つは日本で使われる半夏を配合した漢方薬方には必ず生姜が入り、かなりのものに甘草が配合されていて、煎出のである程度修治されていることになるのか、生姜や甘草に半夏の毒性を減ずる作用があるのか、このあたりは今後の研究が待たれているところである。

半夏の粉末が口唇を原因の一つとして、粘液細胞中のシュウ酸カルシウムの針晶が付きささるからだという説があって、煎液ではこの針晶が粘液に包まれてしまうから刺激が少ないという説明が付く。顕微鏡で見ると数は多くないが、粘液細胞中にいちじるしい束針晶が認められるけれども、この針は直径が1ミクロンほどであまりにも小さく、人間の皮膚を刺激するとは思えず、炎症を起すほどの孔をあけるとは思えない。また、煎液中にもこの束針晶は

粘液に包まれることもなく、浮遊しているのである。

(小太郎漢方ニュース 「生薬アラカルト」 木村孟淳 より)

〈参考文献〉

- (1) 第13改正日本薬局方
- (2) 中薬志 人民衛生出版社
- (3) 中国常用中薬材 科学出版社
- (4) 中薬大辞典
- (5) 中医臨床のための中薬学 神戸中医学研究会
- (6) 薬材資料汇编
- (7) 中国薬典 広東科学技術出版社
- (8) 月刊「和漢薬」240号、389号
- (9) 経史証類大観本草
- (10) 小太郎漢方ニュース 生薬アラカルト
- (11) 季刊現代東洋医学 vol. 16, No. 1
- (12) 漢方医学 vol. 8(1984. 3)
- (13) 生薬学雑誌 vol. 37, No. 1, p. 73~83(1983)

半夏味辛平生微寒熱溫有毒主傷寒熱心下堅下

氣喉咽腫痛頭眩胃脹欬逆腸鳴止汗消心腹胃膈痰

熱滿結效嗽上氣心下急痛堅痞時氣嘔逆消癰腫墮

胎療瘞黃悅澤面目生令人吐熱令人下用之湯洗令

滑盡一名守田一名地文一名水玉一名示姑生槐里

川谷五月八月採根暴乾射干為之使惡皂莢畏雄黃生薑

槐里屬扶風今第一出青州吳中亦有以肉白者為佳不厭燥久

用之皆先湯洗十許過令滑盡不爾數人咽喉方中有半夏必須

生薑者亦以制其毒故也周本固云半夏所在皆有生平澤中者

各羊眼半夏圓白為勝然江南者大乃徑寸南人特重之頃來互

用形狀殊異潤南人說苗乃是由跋闕注云虎掌極似半夏生由

跋乃說為尾於此注中似說由跋三事混清陶然不識臣商揚等

重上小下大五月採則虛小八月採則實大採得當以及衰二日

湯洗暴乾之謂論云半夏使忌羊血海藻船楫柴胡為之使有

大毒場淋十嘔吐去骨中痰滿下肺氣主效結新生者摩塗癰腫

開胃健脾止嘔吐去骨中痰滿下肺氣主效結新生者摩塗癰腫

不消能除瘰癧氣虛而有痰氣加而用之

食反胃霍亂轉筋腸腹冷痰瘧

圖經曰半夏生槐里川谷今在處有之以齊州者為佳二月生

芍藥垂根下相重生上大小皮黃肉白五月八月採者實大然以圓白

衰二日湯洗暴乾一云五月採者虛小八月採者實大然以圓白

陳久者為佳其平澤生者甚小各羊眼半夏又由跋絕類半夏足

南高近一二尺許根如維方大小多生林下或云即虎掌之小者是

以相亂半夏主胃冷嘔噎方藥之最要張仲景治反胃嘔吐大半

夏傷半夏三升人參三兩白蜜一升以水一斗二升和揚之一百

四十遍煮取三升半溫服一升日再亦治腸間支飲又主嘔噎穀

不得下眩悸半夏加茯苓湯半夏一升生薑半斤茯苓三兩切以

水七升煎取一升半分溫服之又主心下悸半夏麻黃先四逆嘔

分節末蜜九大大如小豆每服三九日三其餘主寒厥赤風四逆嘔

吐附子梗米湯及傷寒方用半夏一升洗去滑焙乾搗末小麥麩

治渴瘦五孔皆相通半夏經試驗後方治胃半夏一兩天南星二

一分為末以水調傳之

水二盞藥末二錢薑二片同煎至八分溫服至五服効斗門方

治胃膈壅滯帶去痰開胃用半夏半斤先焙乾搗羅為末以生薑自然

汁和為餅子用濕紙裹於慢火中烘令香熟水兩盞用餅子一塊

如彈丸大入鹽半錢煎取一盞溫服能去胃膈水兩盞用餅子一塊

兩以水和搜切作餅子水煎至熟為度用生薑調和服之

今錄驗治痰痺半夏末方寸匕雞子一枚頭開雞子內以鐵子

坐之於炭上煎藥成錢相公箇中方以水研塗之立止

師方治傷寒病死不止半夏熱洗子母秘錄治小兒腹脹半

酒和丸如粟米大每服二九生薑湯吞下不差又方治五絕一

加之日再服又若以火炮之為末貼臍亦佳

日瀉壁壁三日瀉水四日瀉乾五瀉乳凡五絕皆以半

夏一兩搗篩為末九如大豆內臍中愈心溫者一日可治產書

治產後暈絕半夏一兩搗為末冷水中愈心溫者一日可治產書

九如大豆內臍中即愈此是扁鵲法御藥院治膈壅風痰半

發侵一宿溫湯洗五七遍去惡氣日中煎乾搗為末漿水搜餅子

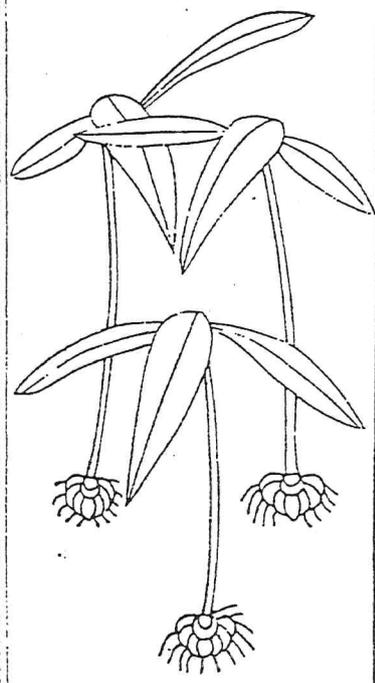
日中乾之再為末每入生腦子一錢研勻以漿水腹脚先雞頭火

絳盛通風氣陰乾每一紫靈元君

半夏末如大豆許吹鼻中

九好茶或薄荷湯下

夏半州齊



醋六兩二味攪令獨將半夏投於中洗三遍用之聖惠方氣喘

逆不下食用半夏半兩湯浸洗七遍去滑生薑一兩同剉又方

天南星味苦辛有毒主中風除痰麻痺下氣破堅積消  
 癰腫利消膈散血墮胎生平澤處有之葉似蕁菜根

如芋二月八月採之今附臣陽錫等謹按陳師器云天南星

東山谷葉如荷獨莖用根最良日華子云味辛烈平畏附子乾薑  
 注置晉撰損益血王此虫交附疥癬惡瘡入藥炮用又各鬼蕁蕁

圖經曰天南星本經不載所出州土云生平澤今處處有之二

月開花似蛇頭黃色七月結子作穗似石榴子紅色根似芋而圓

說天南星如本草所說即虎掌也小者為由跋後人採用乃別立

一名爾今天南星大者四邊皆有子用時盡削去之又爾雅云

半夏高一二尺由跋高一二十寸此正設相反言也今由跋苗高一

尺徑似蕁蕁而無斑根如雞卵半夏高亦一尺寸亦有盈尺者根

如小指正圓也江南吳中又有白蕁蕁亦曰鬼芋根都似天南星

生平澤極多皆雜採以為天南星了不可辨而中所收往往是也

但天南星小柔膩肌細炮之易裂差可辨爾古方多用虎掌不言

天南星天南星近出唐出中風痰毒方中多用之續博信方治風

痛用天南星躑躅花並生時同搗羅作餅子醃上蒸四五過以綿

葛囊盛之候要即取焙搗為末蒸餅丸如梧桐子溫酒下一丸緩

脚骨痛空心服勿

前痛食後服大良

**經驗方** 治急中風目瞑牙緊無門下藥者用此末子以中指

名開關散天南星搗為末白龍腦二件各等分又方 馬疥小兒走

研自五月五日午時為末白龍腦二件各等分又方 馬疥小兒走

損骨及血攻蝕必効方天南星一箇當心作坑子安雄黃一塊在

內用麩裏燒候雄黃作汁以蓋子合定出火毒去麩研為末入麩

香少許又方 治婦人一切風攻頭目痛天南星一箇搗地坑子火

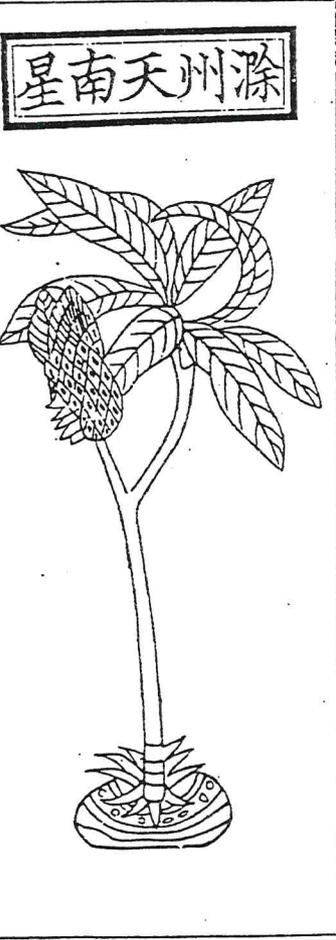
候冷取出為末每服一錢又方 治驚風墜地天南星一箇重一兩

字以酒調下重者半錢又方 換酒浸七伏時取出於新瓦上兩

迴炭火炙令乾裂置於濕地去火毒用瓷器合盛之冷膏末用朱



江寧府天南星



滁州天南星

本草十一

十一

虎掌味苦溫微寒有大毒主心痛寒熱結氣續聚伏梁

傷筋癆利水道除陰下濕風眩生漢中山谷及窠

句二月八月採陰乾蜀漢為之使惡莽旱陶隱居云近道亦有形似半夏但皆大四邊有子如虎掌

今用多破之或三四片爾方煎亦不正用也唐本注云此藥是由

改宿者其苗一莖莖頭一葉技了音鴉脰古叶切莖根大者如拳

小者如雞卵都似扁柿四畔有圓牙看如虎掌故有此名其由跋

是新根猶大於半夏二倍但四畔無子牙爾陶云虎掌似半夏

即由跋以由跋為半夏釋由跋苗全欲為尾南人至今猶用由跋

為半夏也臣鶴鑿錄雜說蜀本圖經云其莖端有八九葉花生莖

間根周圍有牙然若割掌也吳氏云虎掌神農雷公苦死毒跋伯

桐君辛有毒立秋九月採輟性論云虎掌使味甘不入腸服能治

風眩目轉主吐瀉腸痛主傷寒時疾強陰

**圖經**曰虎掌生漢中山谷及窠句今河北州郡亦有之初生根

如雞外周匝生圓芽二三枚或五六枚三月四月生苗高尺餘獨

莖上有葉如五六出分布尖如圓一菓生七八莖時出一莖作獨

穗直上如鼠尾中生一葉如鼠裏莖作房傍開一口上下火中有

花微青褐色結實如珠子大熱即白色自落布地一子生二窠丸

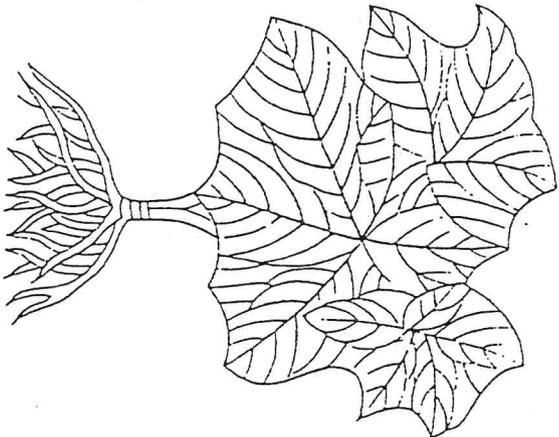
月苗殘取根以湯入器中漬三七日湯冷乃易日換三四處洗去

暴乾用之或再火炮之冀州人菜園中種之亦呼為天南星江

州有一種草葉大如掌面青背紫四畔有芽如虎掌生三五葉

為一本青治心痛寒熱積氣不結花實與此名同故附見之

江州虎掌



冀州虎掌

